學界展望

わが國における十五—十七世紀の北アジア史研究

宮脇淳子

元朝が漢地から驅逐され、フビライ家最後のハーン、トクズ・テムルがアリク・ブカ家のイェスデルに殺された後の北アジア史は、今もなお茫洋として摑みがたい。ここでは、わが國におけるこの時代に關する研究を概觀し、殘る問題の所在を明らかにして、今後の展望とするつもりである。時代を十五—十七世紀に限ったのは、紙數の制限のためでもあるが、現存する蒙文年代記がすべて十五世紀末以降の史實を傳えるものであり、ここから清朝統治下に入るまで連續性が見られるからである。また、地域としてはモンゴリアを中心とした、オイラットをも含むモンゴル民族の動向に焦點を當てて、研究を整理することにした。むろん、モンゴル史をそれ自體で完結するものと見ることはできず、對中國關係はもちろんのこと、滿洲・チベット・東トルキスタン・カザーフ・及びロシアが必然的に關連してくるのであるが、現實にそれらを一つの世界として總合して扱った論文はほとんどなく、視野を擴げすぎてまとまりを缺くことを恐れたので、ここでは簡單に觸れる程度に止めた。讀者の諒とせられんことを乞う。

本論で取扱う時期の下限とした清朝統治下のモンゴルにおいて、內蒙古四十九旗の內、半ばに近い二十三旗は皆ダヤン・ハーンの裔と稱せられ、外蒙古八十六旗に至っては、厄魯特三旗を除き悉くダヤン・ハーンを祖とする。しかし、エセン帝國崩壞後のモンゴリアを再統一したこのハーンについては不明な點が多く、史料の異同も激しいため、わが國においていわゆるダヤン・ハーン論爭が展開された。

わが國で初めてこの問題に觸れたのは、原田淑人「明代の蒙古」(『東亞同文會報告』、一九〇八、九、『聖心女子大學論叢』四五、一九七五に再錄)の第八章「歹顏汗の蒙古統一」であった。その後、和田清氏が『內蒙古諸部落の起源』(目黑書店、一九一七)で原田說の論旨を徹底し、さらにその後少しく自說を變更されて、「達延汗について」と題する論文を『東亞史研究(蒙古篇)』(東洋文庫、一九五九)に收められた。これに對する批判から出發したのが、萩原淳平氏の「ダヤン・カンの研究」(『明代滿蒙史研究』京都大學文學部、一九六三)である。次いで、萩原氏の論文に對して書評の形で松村潤氏が論及し(『東洋史研究』二三—一、一九六四)、翌年、佐藤長氏が「ダヤンカーンにおける史實と傳承」(『史林』四八—四、一九六五)を著した。これらを受けて岡田英弘氏が「ダヤン・ハガンの年代(上・下)」(『東洋學報』四八—三、四、一九六五、六六)を發表し、これを萩原氏が「ダヤン・カーンをめぐって」(『史林』五三—六、一九七〇)で再批判したのである。

諸氏ともに、すべて、蒙文年代記「蒙古源流」(エルデニイン・トブチ)[1]の傳えるダヤン・ハーンの年代の批判から出發しており、論爭の焦點は、蒙文史料と漢文史料の信憑性と解釋の相違にあっ

た。これらが、わが國におけるこの時代の北アジア史研究の代表的論爭であるという意味からも、また、これに續く研究を考える上でも、ここで各人の說を紹介する意義があるだろう。

蒙古源流によると、ダヤン・ハーンは一四七〇（庚寅）年に七歲で卽位し、七十四年の治世を經て一五四三（癸卯）年八十歲にして歿したということである。和田氏はまず明實錄との對照により、元來十二支だけで記してあったモンゴル史料を源流の著者が誤解して、卽位年を十二年早い年代としたと述べ、死去の年も明の記錄より推察して、一五三二或いは三三年であったとした。また後世のモンゴル史料がダヤン・ハーンはバト・モンケであるとしているのに據り、先に『內蒙古諸部落の起源』でダヤン・ハーンがバト・モンケの弟バヤン・モンケであるとした說を撤回した。さらに、ダヤン・ハーンの事業として、主として蒙古源流に基き、明の記錄を引照しつつ(1)イスマイルの擊滅とユンシエブ併合、(2)オイラットの擊攘、(3)ホーサイ討伐とトメト・モンゴルジン併合、(4)右翼併合、(5)ウリヤンハン討滅の五大事業を擧げている。

これに對して萩原氏は、專ら中國史料によって和田說を批判し、一四八七（成化二十三）年に明側に報ぜられた小王子の死を根據にして、この年兄バト・モンケが歿したのであり、これ以降の小王子こそが、その弟バヤン・モンケ・ダヤン・ハーンであると述べた。またその卒年にも明側史料を利用して、一五一九或いは二〇（正德十四、十五）年と推定し、この結果、イスマイルの擊破はその先代の小王子の世であるからダヤン・ハーンの事業とはし難く、明實錄によってイスマイルとダヤン・ハーンは協力關係にあったと考えた。さらにオイラット征伐についても疑問を呈し、ウリヤンハン討滅についてもダヤン・ハーンの死後であることから、ダヤン・ハーンの功績は右翼鎭壓のみであったとした。

松村氏は、萩原氏によって保留された蒙文史料の檢討を行い、その結果、蒙文史料に據る限りバト・モンケの後にバヤン・モンケが立ったという事實は認められず、バト・モンケが一四八七年に死んだという萩原說は、一五一三年にバト・モンケ・ダヤン・ハーンの子ゲレセンジェが生まれているから誤りであるとした。ダヤン・ハーンの生歿年及び事業についても、ほぼ和田說を採っている。

これらの和田・萩原兩氏の說に修正乃至は否定を行おうとしたのが佐藤氏の論文である。佐藤氏は、ダヤン・ハーンは、バト・モンケ、バヤン・モンケの兄弟、及び後者の孫でその後を嗣いだボディ・アラクの三人の事蹟を混淆して作り上げられた傳說的英雄であるとし、蒙古源流の傳える干支が本來十二支のみであったと前提して、源流の傳える年代に操作を加えて明史料の所傳に合致せしめようと試みた。その結果、和田說と同じく蒙古源流によって一四六四年兄バト・モンケ生誕、一四六八年に弟バヤン・モンケ生誕、さらに和田說の一四八二年卽位は兄のバト・モンケ、萩原說の一四八七年卽位は弟のバヤン・モンケであるとし、源流に卒年は兎の年とのみあったと考えて、バヤンの卒年を一五一九（己卯）とした。佐藤氏によると、歷史的實在としてのダヤン・ハーンはバヤン・モンケ一人であり、右翼の鎭壓のみが業績であるが、その偉大さが強調された結果、前後の事蹟まで彼のものと考えられるに至ったという。

さて、これらの說に對して岡田氏は、まず諸氏の據った漢譯蒙古源流の「歲次戊子、博勒呼濟農年二十九歲時、生巴延蒙克」は、漢譯本の基いた滿文本の誤譯にすぎず、蒙文の諸本ではこれに當たる

所がいずれも「さてバヤン・モンケ・ボルフ・ジノンは、その二十九歳の戊子の年から三年經って」となっており、バト・モンケの弟バヤン・モンケは存在しないことを述べる。さらに氏は、蒙文史料の傳承を頭から否定してかかる從來の日本の學界の態度を手嚴しく批判し、論文中各種の蒙文年代記について簡單な紹介を行った。それによると、蒙文年代記には、オルドス、トメト、チャハル三系統があり、各々蒙古源流、アルタン・トブチ[2]、ガンガイン・ウルスハル[3]に代表される。氏はこれらの蒙文史料の信憑性を考證した後、ダヤン・ハーンは一四六四年に生まれ、明史料の傳える一四八七年その父ボルフ・ジノンの歿後卽位し、蒙文史料に據る所の在位三十八年の後、一五二四年に歿したと結論づけた。

最後に擧げた萩原氏の論文は、邦譯の蒙古源流とアルタン・トブチを異った視點から解釋する事によって、氏の前說を補強しようと試みたものである。氏は蒙文史料はダヤン・ハーンの妃となったマンドハイ・ハトンを中心に書かれたもので、その業績を讚美するあまり、史實をゆがめる說話化が行なわれたと言う。また、史實のバト・モンケはイスマイルに擁立されてハーン位につき、マンドハイ・ハトンと結婚した弟のバヤン・モンケと數年間二勢力に分かれて對立したと述べ、明側にこそ、蒙文史料に傳えられる說話が作り出される以前に、斷片的ではあるがほぼ史實と同時代的に眞相が傳えられ、蒙文に於ては削除されてしまったバヤン・モンケの名を滿漢文蒙古源流が殘したと考えた。

岡田氏はこれより先の一九六六年、「ダヤン・ハガンの先世」(『史學雜誌』七五―八) と "Life of Dayan Qayan" *Acta Asiatica* 11, The Tōhō Gakkai. を發表している。前者は、先に擧げた三系統の蒙文年代記の所傳を翻譯しながら、ダヤン・ハーンの祖先と家系を考察したものであり、後者はダヤン・ハーンの年代と事蹟等を、ここでは漢籍をも利用しつつ簡單に整理したものである。ただ氏は前者の中で、ボルフ・ジノンとバト・モンケ、バヤン・モンケ等の名稱の問題を、いずれダヤン・ハーンの事蹟と關連して再論するつもりであると述べながら、今日に至るまで筆を置かれたままであるのは眞に殘念である。氏が蒙文史料の利用、とりわけ蒙古語からの直譯の必要を說いたのであるから、論爭の是非は別として、この時代の北アジア史研究の進展のため、再び筆を執られることを願う。

さて、エセン帝國崩壞後よりガルダンによるジューン・ガル帝國建設に至るまでのオイラット族に關しては、すでに一九五〇年代にわが國の學者が注目していた。まず護雅夫氏が、「哈喇忽剌と巴圖爾渾臺吉」(『和田博士還曆記念東洋史論叢』、一九五一) において、ジューン・ガル王家の祖[4]ハラフラとその子バートル・ホンタイジに關するバラス、ハワース[5]、バッデレー[6]の說を紹介し、その誤りを正した。次いで羽田明氏が「厄魯特考」(『東方學』一〇、一九五五)、「西套厄魯特の起源」(『神田博士還曆記念書誌學論叢』、一九五七) を著した。氏は前者において四(ドルベン) オイラットを「四姓のオイラット」とした場合、史料によって四部の數え方に異同の見られることを述べ、シュミット、ウラジーミルツォフ等の、チンギス・ハーン時代に西モンゴル族が四萬戶に編成され、その名稱が組織が崩れてしまった後も踏襲されたとする說を紹介した。また、「厄魯特」はオイラットの四姓の一つであるオーロトの音を寫したもの

で、本來オイラットの同義語ではなかったことを明らかにし、エルートがもともとホシュート部を指したか、チョロース＝ジューン・ガル部を指したかについての歐人の見解に考證を加えた。この問題については、後に氏自身が「再び厄魯特について」（『史林』五四―四、一九七一）で觸れ、ここではエルート＝ホシュート説を積極的に主張した。オイラットの部族に關する研究には、後に、岡田英弘「ドルベン・オイラトの起源」（『史學雜誌』八三―六、一九七四）がある。氏によれば、オイラットの年代記、ヴォルガ・トルグートのエムチ・ガワンシャラブの『四オイラット史』[7]、及びホシュートのバートル・ウバシ・トゥメンの『四オイラット史』[8]には合わせて十集團が見られるが、オイラット自身がこれを四部に分類しようとしているという。そして考證の結果、ドルベン・オイラットの起源は、一三八八年にイェスデルがフビライ家を倒してアリク・ブカ家の新王朝を樹立した時、西北の四大種族、舊オイラット、バルグト、ナイマン、ケレイトが連合體を結成し、これがアリク・ブカ家の外戚に因んでまたオイラットと呼ばれたことにあるとする。この舊オイラット系がホイトとバートト、バルグト系がバルグとブリヤート、ナイマン系がドルベトとジューン・ガル、ケレイト系がトルグートである。これに十五世紀中葉東モンゴル族のホシュートが加わり、十七世紀に至る。さらに、ドルベン・オイラットをオーロトとも呼ぶ問題については、最初に連合體の中核となった舊オイラット系と、次いで勢力を持ったナイマン系のチョロース（ドルベト、ジューン・ガル）とを同母異父兄弟として結びつける傳承より發する名稱であると考える。

このような諸集團によって構成されていたオイラットが、十七世紀末ジューン・ガルによって大統一される過程は、內外の研究者の最も注目するところであった。先に護氏が觸れた問題をさらに詳しく考證したのが、若松寛氏の「カラクラの生涯」（『東洋史研究』二二―四、一九六四）である。蒙古源流によると、一五五二、六二、七四年の三度に亙ってダヤン・ハーンの子孫であるトメトのアルタン・ハーンとその一族が四オイラットを征伐し、その結果オイラット族は外モンゴリアの主導權を失ってしまった。さらに彼等は、ハルハのジャサクト・ハーン一族のアルタン・ハーン（ロシア史料に見えるアルツン・ツァーリ）によってイルティッシュ下流域へ逐われた。ジューン・ガル王國の祖と言われるハラフラの生涯は、このアルツン・ツァーリの壓迫から四オイラットを解放する事業に費されたと氏は言う。氏はわが國において初めて『ロシア・モンゴル關係史料集』[9]を利用し、以前はパラス、バッデレー等に據る他なかった當時の北アジア史を、一次資料によって解明しようとした。

若松氏はまず、アルツン・ツァーリがロシア・ツァーリにあてた信書によってハラフラの實在を示し、アルツン・ツァーリとハラフラとの敵對關係を明らかにした。また、パラスの言う「ハラフラの子バートル・タイジはすでに一六一六年に父から分かれてイルティッシュ河に居住していた」という記事をロシア文書中の「ペトロフらは一六一六年、大タイシャ、ボガティリ・タライ・タイシャの本營に到着した。」という記述で裏附けたが、ペトロフらによる「全カルマック筆頭のタイシャは、このボガティリ・タライ・タイシャである。」という記述に疑問を呈した。ロシア史料によると、一六二〇―二一年にハラフラとアルツン・ツァーリの爭いが起こるがハラフラの慘敗に終る。この時ハラフラと共に戰ったタイシャたちを、

氏はドルベト、トルグートの首長に比定するが、バートルの名がロシア文書に見えないことに疑問を殘している。實はこれらは重要な問題となるのであるが、後にまとめて考察したい。さて、ロシア史料は一六二三年カルムック軍が再び全勢力をあげてアルツン・ツァーリとの決戰に乘出したことを傳えるが、戰いの結果についてはロシア側の記錄はなく、氏はパラスの言う「ハラフラは再度モンゴルに潰走させられた」を妥當であるとする。次に氏は、一六二五年のジューン・ガル部の內亂について、ロシア文書の記述「チョクルとバイバギシュ兩タイシャの兄弟チン・タイシャが死に、その家畜と部民をめぐって、チョクルとバイバギシュの間に不和が生じた」により、これをハラフラの子チン・タイシャの遺產をめぐる兄弟の爭いであると考えた。これ以後ハラフラについてはロシア側に記述はなく、ハラフラの子バートルが一六三五年にホンタイジと稱したことにより、この時までに歿したと考えられるとして論を終わっている。

ロシア史料の傳える一六二三年のアルツン・ツァーリとカルムックとの決戰を、モンゴル史料より考證したのが、岡田英弘「ウバシ・ホンタイジ傳考釋」(『遊牧社會史探究』三二、一九六六)⑩である。オイラットの文學作品として著名なウバシ・ホンタイジ傳を氏はほぼ全譯し、次いでウバシ・ホンタイジ(=アルツン・ツァーリ)に敵對するオイラットの諸酋を比定した後、この戰いでウバシ・ホンタイジが殺され、四オイラットがモンゴルを破ったことを明らかにした。傳によると、オイラット軍の情況は次の如くである。

マンガトの子サイン・セルデンキ(氏に據るならばドルベト)は二千の兵を率いる。ホイトのエセルベイン・サイン・キヤは四千の兵を率いる。ジューン・ガルのホトゴイト・ハラ・フラは六千の兵を率いる。オイラットのサイン・テメネ・バートル(トルグート)は八千の兵を率いる。四虎の長兄ホシュートのバイバガス・ハーンは一萬六千の兵を率いる。

これによって明らかであるように、當時のハラフラの勢力を過大に評價することは、羽田氏が先に擧げた「再び厄魯特について」で述べたように、適當ではあるまい。さらに、ハラフラが四オイラットの一首長にすぎなかったのに、その子バートルが「一六一六年に全カルマックの筆頭のタイシャ」であったとはとても考えられない。このタライ・タイシャがズラートキンの言うようにドルベトのダライ・タイシであり⑪、若松氏がジューン・ガルのハラフラの子と考えたバイバギシュが、實はホシュートのバイバガス・ハーンであるとするならば、一六二五年以降の四オイラットの內亂は、ジューン・ガル部の內亂にオイラット族全體がまきこまれたものとは言えず、ジューン・ガル王國勃興史も根柢から考え直さねばならないだろう。羽田氏はこの他にも、當時のオイラット史に關して問題點を幾つか指摘しているが、いまだ解明されるに至っていない。

このオイラットの內亂後、トルグート部はホー・オルロクに率いられてロシアのヴォルガ河邊に移り、ホシュート部はグシ・ハーンに率いられて一部分青海に移った。このグシ・ハーンについてチベット史料より考證を加えたのが、山口瑞鳳「顧實汗のチベット支配に至る經緯」(『岩井博士古稀記念典籍論集』、一九六三)であり、青海進出以前のグシ・ハーンに關するロシア古文書の記錄を整理したのが、若松寬「ロシア史料より見たグシ汗の事績」(『史林』五九—六、一九七六)である。ところで、グシ・ハーンの青海移牧のき

っかけとなったハルハ部のチョクト・タイジについては、紅教の熱心な信者であったと言われているのみで事蹟も定かではない。僅かに、彼についてモンゴルに殘存する碑文を紹介した岡田英弘「Čortu Qong Tayiji について」(『アジア・アフリカ言語文化研究』一、一九六八)があるだけである。また、佐藤長氏は、青海に移動したホシュート部を中心とするオイラット各人の系統を、清朝史料を利用して整理し、「近世青海諸部落の起源(上・下)」(『東洋史研究』三二―一、二、一九七三)を著した。

さて、再びジューン・ガル王國勃興史に目を向けると、バートル・ホンタイジ歿後センゲからガルダンに至るオイラット史に關しては、若松寛「センゲ支配期のジュンガル汗國の內亂」(『遊牧社會史探究』四二、一九七〇)、羽田明「ガルダン傳雜考」(『石濱博士古稀記念東洋史論叢』、一九五八)、同「ガルダン傳考證」(『東方學會一五周年記念論集』、一九六二)がある。若松氏はズラートキン『ジュンガル汗國史』の所說を紹介し、さらにズラートキン氏の據った史料に直接當って、一六五〇年代のチョロース、ホシュート兩部に係わる內亂を述べたが、しかし、モンゴル史料に據ると、當時ハーンと稱している者は、ホシュートのオチルト・チェチェン・ハーン唯一人であって、この時代を「ジュンガル汗國」と呼べるかどうかは、羽田氏の言うように疑問である。一方、羽田氏は前著で「清朝の英主康熙帝とモンゴリアの覇權を爭い、武運拙くアルタイ山中で敗死した草原の風雲兒」ガルダンの誤傳の多い前半生について、パラス、バッデレー等の研究を漢籍に據って誤りを正し、その生年、系譜とハーン位承襲について考證した。さらに後者では、前論を踏まえてガルダンの襲位前後の事情や、第五代ダライ・ラマの執權サンギェ・ギャツォとの關係について考證し、一六八八年モンゴリアへ侵入するまでのガルダンのタリム盆地征服について述べたが、やはりガルダンについても史料の異同が激しく、そのホンタイジと稱し、ボショクト・ハーンと稱した時期等、完全に解明されたとは言い難い。

このように、エセン歿後、ジューン・ガル部によって大統一されるまでのオイラット史は、內外の學者が注目し、關係文獻も相當數にのぼるにもかかわらず、いまだ幾多の疑問を殘している。今後とも大いに研究の餘地を殘す分野と言えよう。しかし、眼を東方、ダヤン・ハーン以後のモンゴルに向けると、ここはさらに解明されない部分が多いのである。先にも述べたが、ダヤン・ハーン論爭は、ダヤン・ハーンの存在と生歿年の決定に止まり、十七世紀に滿洲族、後の清朝と關係を持つまでのモンゴル史、とりわけ中國と接觸を持たなかった外モンゴリアの歷史は、蒙文年代記に據る他なかった。

アルタン・ハーンのオイラット征伐によって外モンゴリアに領域を擴げたハルハ部の歷史に關しては、年代記を整理、紹介した、OKADA, Hidehiro, "Outer Mongolia in the Sixteenth and Seventeenth Centuries." *Journal of Asian and African Studies*. 5, 1972. があるだけである。これより後、ガルダンの侵入を受けるまでのハルハについては、その西北隅に位置し、早くからロシアと交渉を持ったウバシ・ホンタイジを初代とする三代のアルツン・ツァーリに關して、若松寛「アルトゥン・ハーン傳考證」(『內田吟風博士頌壽記念東洋史論集』、一九七八)、同「アルトゥン・ハ

ーン三世傳考證」（『京都府立大學學術報告・人文』三〇、一九七八）、清朝と接觸を始めてより後歸屬に至るまでのハルハの實情を考察した、宮脇淳子「十七世紀清朝歸屬時のハルハ・モンゴル」（『東洋學報』六一―一・二、一九七九）がある。若松氏は、バッデレー、シャスティナ[12]兩氏の研究に據りつつ、先にも述べた『ロシア・モンゴル關係史料集』を譯出し、ロシア使節の見た當時のモンゴル・オイラット關係や中國との貿易情況、及びアルツン・ツァーリとロシアの關係等を明らかにした。宮脇は清朝史料とロシア史料に據り、ハルハが三ハーン部に分かれ、黃教教主であるジェブツンダンバ・フトクトがこれを率いたと言われているのは、實は清朝歸屬後のことであって、歸屬前は彼はまだ全ハルハの指導者ではなく、モンゴル人自身は傳統的な左右翼への所屬意識が強かったと述べた。しかし、この時代のハルハについても、右翼に屬したアルツン・ツァーリが宗主のジャサクト・ハーンを殺すに至った背景、オイラットに對するハルハの支配權の衰退からガルダンの侵入に至るハルハ・オイラット關係等、數多くの疑問を殘したままである。

最後になったが、歷史的に解明されない部分の多いこの時代の社會集團について、種々の蒙文年代記を檢討しながら述べたものに、森川哲雄氏の一連の勞作がある。發表年代順に擧げると、「中期モンゴルのトゥメンについて」（『史學雜誌』八一―一、一九七二）、「ハルハ・トゥメンとその成立について」（『東洋學報』五五―二、一九七二）、「中期モンゴルのハーンとサイトの關係について」（『待兼山論叢』六、一九七三）、「オルドス・十二オトク考」（『東洋史研究』三二―三、一九七三）、「チャハル・八オトクとその分封について」（『東洋學報』五八―一・二、一九七六）、「トゥメト・十二オトク考」（『江上波夫教授古稀記念論集・歷史篇』、一九七七）、「「四オイラト史記」に見られる諸集團について」（『九州大學教養部・歷史學・地理學年報』二、一九七八）、以上である。[13]

ウラジーミルツォフが『蒙古社會制度史』の中で、「我々の前には初めと終りがある。この二つのモメントに關する材料を基とし、又その後の、十七世紀の資料を利用して我々はその中間時代を推斷しなければならない」と述べ、我が國でも田山茂氏が『清時代に於ける蒙古の社會制度』（文京書院、一九五四）を著わす動機の一つとしてこの點に言及したことに對し、森川氏は、前者は當時の中國史料の大半を利用し得ず、後者は蒙文史料に關する認識が全く不足していると述べる。また氏は、ウラジーミルツォフの言う「中期」を一樣に考えることはできず、社會集團についても元朝時代に直接關係あるものと、半ば以降のものとの間には一線を劃さねばならないとして、蒙文史料によって、トゥメンとオトクの關係、トゥメンとウルスの關係を考證し、モンゴルの社會集團の變遷を述べた。さらにその後は、各部に傳承された系譜を利用しつつ、以前には和田清氏が『東亞史研究（蒙古篇）』の各論で考證した他、田中克己「ハルハ五部の成立と住地」（『東方學』一六、一九五八）があるにすぎなかった、ダヤン・ハーン以後のモンゴル諸集團の名稱や所屬・構成を明らかにしてきた。森川氏の一連の研究は、それまでわが國ではあまり知られていなかった種々の蒙文年代記を引用・紹介したという點においても、空白部分の多いこの時代の北アジア史研究に貢獻していると言えよう。しかし、氏の據った蒙文史料はすべて十七世紀に入ってから編纂されたものであり、その中に傳えられる各集團のトゥメンやオトクの數が、どの時代の實情を反映しているかを

考える時、氏の一連の研究のスタティックとも言える史觀が、今後ダイナミックな歴史研究に結びついて發展することを望みたい。

岡田英弘「ダヤン・ハーンの六萬戸の起源」(『榎博士還暦記念東洋史論叢』、一九七五)は、ダヤン・ハーンの六萬戸の起源を、モンゴル帝國期の有力集團にまで溯ろうとしたものである。

以上、筆者自身の觀點から各論文を要約してきた。すでに明らかであるように、この時代の北アジア史が、それぞれの分野においては精緻な史料操作がなされ、歴史事實が追求されているにもかかわらず、全體像がいまだ茫洋としたままであるのは、個々の研究が相互に關連を持たないためではないだろうか。このような地域的廣がりを持つ分野においては、從來の、漢籍のみに據る東洋史學の方法論ではフォローしきれず、モンゴル語はもちろんのこと、ロシア語・滿洲語・チベット語・チュルク語史料等からのアプローチが必要である。とは言っても、個々の研究者ではとてもすべてをカバーしきれないのが實情ではあるが、今後殘された疑問點が解明されるためには、それぞれの論文の據った史料を總合し、モンゴル、オイラット各部の動向を合わせ見る視野が不可缺なものとなるであろう。また、モンゴル帝國時代の北アジアについては、東西の史料と豐富な研究により、その生活や遊牧形式に關して我々はかなり具體的なイメージを持つことができる。これに對して、これより時代を下る十五—十七世紀の北アジア史がほとんど解明されないままであるのは、これまでも再三述べられてきたように非常に殘念なことである。

最近、「清朝の英主康熙帝」と「草原の風雲兒ガルダン」とのモンゴリアの覇權をめぐる爭いについて、滿洲語で書かれた康熙帝自筆の手紙を譯出した、岡田英弘『康熙帝の手紙』(中公新書五五九、一九七九)が出版された。これは論文の形式こそ取っていないが、一次史料に基き、この時代の北アジアに關する具體的なイメージを我々に與える好著である。また、當時の北アジア諸情勢について、氏は滿洲からモンゴリア、チベットから中國をも含む廣い視野で、歴史的背景を鮮かに解明してみせる。ただ、學術論文ではないため注釋もなく、個々の事象について僅かなスペースを割くのみであるから、如何に明快な解釋ではあってもにわかには從い難い。今後の各々の分野における考證を待ちたい。

我々が十五—十七世紀の北アジア史を研究する時、モンゴル帝國時代に比べて史料的に劣ることは決してなく、漢籍こそ少ないが、モンゴル語・チュルク語諸族の殘した年代記、歐人の旅行記、ロシア帝國にあてた信書や使節の報告等、數多くの史料を利用することができる。先に述べたように、ダヤン・ハーン論爭では蒙文史料の信憑性が問題になったが、視點を變えれば、我々は、例えば年代記からは、その民族の民族性や價値觀を導き出すことが可能なのである。よって、個々の史料の性格を吟味した上で、それらを比較・對照し、總合するならば、わが國におけるこの時代の北アジア史研究は、今後一層の發展が期待できるであろう。

最後に、本論で紹介しなかった關連論文をまとめて擧げておく。明代のモンゴルについて、本論で擧げた他に、「明初の蒙古經略」、「俺答汗の覇業」等、合わせて十七篇の論文が、和田清『東亞史研究(蒙古篇)』に收錄されている。その他、萩原淳平「明初の北邊について」(『東洋史研究』一九—二、一九六〇)、同「土木の

變前後—經濟問題を中心としてみた明蒙交渉—」(『東洋史研究』一一—三、一九五一)、川越泰博「亙剌政權に關する一考察—とくに支配權力の樣態について—」(『東方學』三九、一九七〇)、同「亙剌の對明侵寇の原因をめぐって—『土木の變』前史として—」(『中央大學大學院・論究』四、一九七二)、田村實造「明代のオルドス—天順・成化時代—」(『東洋史研究』一九—二、一九六〇)、萩原淳平「小王子に關する一考察」(『東洋史研究』一七—四、一九五九)、同「アルタン・カーンと板升」(『東洋史研究』一四—三、一九五五)、同「明代嘉靖期の大同反亂とモンゴリアー農耕民と遊牧民との接點—(上・下)」(『東洋史研究』三〇—四、三一—一、一九七二)、田村實造「明と蒙古との關係についての一面觀—とくに馬市を中心として—」(『史學雜誌』五二—一・二、一九四一)、青木富太郎「センゲの順義王承襲について」(『東方學』一四、一九五七)、同「チュルゲの順義王承襲について」(『史學雜誌』六六—八、一九五七)、同「ボショクトの順義王承襲について」(『北アジア民族學論集』二、一九六六)。

つい最近、萩原淳平『明代蒙古史研究』(同朋舍、一九八〇)が出版された。この中で、第五章「リクダン・カーンの生涯とその時代」が新たに書きおろされたものであり、第四章までには、ここで擧げた氏の論文が、すべて訂正增補した上で掲載されている。

蒙文年代記關係では、岡田英弘「蒙古源流年表稿」(『史學雜誌』七一—六、一九六二)、同「書評、アサラクチ・ネレト・テウケ」(『東洋學報』四八—二、一九六五)、森川哲雄「"Činggis Qayan-u Yeke Öčig"について」(『日本モンゴル學會會報』六、一九七五)、同「書評、著者不明『四オイラト史記 Dörbön Oyiradiyin Tüükei Tuji』」(『東洋學報』五九—一・二、一九七七)。

ラマ教關係では、若松寛「カルムックにおけるラマ教受容の歷史的側面」(『東洋史研究』二五—一、一九六六)、同「蒙古ラマ教史上の二人の弘法者—ネイチ・トインとザヤ・パンディター—」(『史林』五六—一、一九七三)、同「ボグドチャガンラマとココホトのラマ教」(『鷹陵史學』一、一九七五)、古くなるがジクメ・ナムカ『蒙古喇嘛教史』外務省調査部譯(生活社、一九四〇)、橋本光寶『蒙古の喇嘛教』(佛教公論社、一九四二)。

ジューン・ガル王國について、若松寛「ツェワン・アラブタンの登場」(『史林』四八—六、一九六五)、羽田明「ジューンガル王國の文化—遊牧民族における外來文化の受容—」(『京都大學教養部・人文』五、一九五九)、同「ジューンガル王國とブハーラ人—內陸アジアの遊牧民とオアシス農耕民—」(『東洋史研究』一二—六、一九五四)、佐口透「タランチ人の社會—イリ谿谷のウイグル部落史、一七六〇—一八六〇—」(『史學雜誌』七三—一一、一九六七)等、但し、カザーフ及び東トルキスタン關係については省略した。

モンゴル法典については、リャザノフスキー『蒙古法の基本原理』青木富太郎譯(生活社、一九四三)、田山茂『蒙古法典の研究』(日本學術振興會、一九六七)、及び島田正郎氏の一連の研究がある。

その他、清代のモンゴルについて、矢野仁一『近代蒙古史研究』(弘文堂書房、一九一七)、また、『岩波講座世界歷史13、內陸アジア世界の展開Ⅱ』の各稿も併せ參照されたい。

註

① 蒙文蒙古源流の諸本は、普通次のように呼ばれている。

ウルガ本=E. Haenisch, *Eine Urga-Handschrift des mong-*

olischen Geschichtswerks von Secen Sagang (*alias Sanang Secen*). Berlin, 1955.

これを基礎として、異本と校合したものが、次のものである。

Če. Nasunbaljur, *Sagang Sečen: Erdeni-yin Tobči*, Ulanbator, 1958.

殿本＝E. Haenisch, *Der Kienlung-Druck des mongolischen Geschichtswerkes Erdeni yin Tobci von Sagang Secen. Wiesbaden*, 1959.

シュミット本＝I. J. Schmidt, *Geschichte der Ost-Mongolen und ihres Fürstenhauses, verfasst von Ssanang Ssetsen Chungtaidschi der Ordos*. St. Petersburg, 1829.

オルドース本＝Rev. A. Mostaert & F. W. Cleaves, *Erdeni-yin Tobči, Mongolian Chronicle by Saγang Sečen*. Cambridge, 1956.

この他、漢譯蒙古源流及び、滿譯原文とその日本譯よりなる江實譯註『蒙古源流』（弘文堂書房、一九四〇）がある。

② Rev. A. Mostaert & F. W. Cleaves (ed.), *Altan Tobči, A Brief History of the Mongols by bLo bzaṅ bsTan 'jin*. Cambridge, 1952.

これの省略本が通行本のアルタン・トブチであり、この略本アルタン・トブチを譯したものが、小林高四郎『アルタン・トブチ（蒙古年代記）』（外務省調査部、一九三九）である。

③ Пучковский (ред.), Гомбоджаб; *Ганга-йин Урусхал*. Москва, 1960.

④ P. S. Pallas, *Sammlungen historischer Nachrichten über die mongolischen Völkerschaften*. 2 Bde. St. Petersburg, 1776—1802.

⑤ H. H. Howorth, *History of the Mongols, from the 9th to the 19th Century*. 5 vols. London, 1876—1928.

⑥ J. F. Baddeley, *Russia, Mongolia, China, in the XVIth XVIIth & early XVIIIth centuries*. 2 vols. New York, 1919.

⑦ Emči Tabang šes rab: *Dörbön oyirodiyin töüke. Corpus Scriptorum Mongolorum Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongoli*, Tomus V. Fasc. 2—3. Ulanbator, 1967.

⑧ Xošuud noyon Bātur ubaši tümeni tuurbiqsan Dörbön oyiradiyin tüüke. (А. Позднеев: Калмыцкая хрестоматия. Петроград, 1915. стр. 24—43).

⑨ Материалы по истории Русско-Монгольских отношений, 1607—1636., Москва, 1959.

Русско-Монгольские отношения, 1636—1654. Сборник документов., Москва, 1974.

⑩ Če. Damdinsürüng: *Mongγol uran jokiyal-un degeji jaγun bilig orusibai. Corpus Scriptorum Mongolorum*, Tomus XIV. Ulaγanbaγatur, 1959.

⑪ И. Я. Златкин, *История Джунгарского Ханства* (*1635—1758*). Москва, 1964.

この問題については、以前に若松氏自身が書評（『東洋史研究』二五―二、一九六六）で取り上げ、ズラートキンの說を否定し

ている。

⑫ Н. П. Шастина, Русско-Монгольские Посольские Отношения XVII века. Москва, 1958.

⑬ Б. Я. Владимирцов, Общественный Строй Монголов. Ленинград, 1934.
邦譯『蒙古社會制度史』（日本國際協會、一九三七。生活社、一九四一）

〔補註〕

本稿脱稿後、谷口昭夫「齊王ボルナイとボルフ・ジノン」（『三田村博士古稀記念東洋史論叢』、一九八〇）が發表された。氏の論は、ここで紹介したダヤン・ハーン論爭を一歩進めたものであると言えよう。